

Ras^H=P21 をパラフィンブロックより ABC (Avidin-biotin-tylabeled peroxidase complex) 法で染色した。201Tl の集積程度と EGF, EGFR の染色結果は良く合致していた。201Tl の集積は腫瘍の増殖性と何らかの関連を有している可能性がある。

9. 甲状腺癌 131I 療法の限界

筒井 一哉 佐藤 幸示

(県立がんセンター新潟病院・内)

中沢 政司 新妻 伸二

(同・放)

131I 療法の限界を探るため、131I 投与後の生存率曲線と抗腫瘍効果の両面で検討した。

甲状腺癌 131I 療法施行例は 106, 投与回数 153, 肺転移 29, 骨 16, 脳 1, リンパ節 32, 浸潤 26, なし 2 である。131I 投与後の 5 年生存率は、血行性転移あり 42.5%, なし 84.1% であった。腫瘍測定可能症例で抗腫瘍効果をみると、全体の奏効率は 56.0% で、肺転移は 71.4% と良く、骨は 30.0% と悪かった。腫瘍径が 4 cm 未満の早期例の奏効率は 92.9% と良く、それ以上の進展例は 9.1% と極端に悪かった。生存率でも早期例に死亡例はなく、進展例の 5 年生存率は 29.8% と最悪であった。また、骨転移の 70% は進展例であった。血行性転移例で 45 歳未満の若年者の 5 年生存率は 83.3% と良いのに比し、61 歳以上の高齢者は 24.1% と悪かった。当然、131I が病巣に集積しないものも予後不良であった。【結論】131I 療法の効果のないものは、131I の集積しないもの、高齢者の血行性転移、特に、骨転移である。

10. 67Ga スキャン、骨スキャン併用例の検討

鈴木 俊彦 角原 紀義

(盛岡赤十字病院・放)

1988 年 1 月から 89 年 7 月までに、67Ga スキャンと骨スキャンを同時期に行った悪性腫瘍症例は 211 例(301 回)である。このうち未治療、再発例 145 例における 67Ga 集積率は 80 例 55.2% で、卵巣癌、胃癌、肺癌で高率に集積を認めたが、子宮頸癌、頭頸部癌、乳癌では低値を示していた。

骨転移例 19 例 52 病巣および 8 例の多発骨転移巣について 67Ga スキャンによる描出能を検討した結果、52 病巣中 9 病巣にごく軽度の集積、12 病巣に明らかな集

積を認め、合わせて 21 病巣(40.4%)に 67Ga の集積を認めた。疾患別 67Ga 集積率は例数は少ないが、子宮頸癌、原発不明、胃癌、食道癌、肺癌、子宮体癌で比較的高率に、乳癌、肺癌では低かった。多発骨転移 8 例中 6 例に 67Ga の集積を認めた。骨スキャン上欠損を呈した子宮頸癌骨転移巣は、明らかな 67Ga の集積も認めなかった。

11. ガリウムシンチ陽性、18FDG-PET 陰性像を呈した後腹膜線維症の 1 例

窪田 和雄 山田 健嗣 松澤 大樹

(東北大・抗研・放)

目時利林也 斉藤 敏典 (同・泌)

畑澤 順 伊藤 正敏

(同・サイクロ・RI セ)

血沈異常亢進で発見され、ガリウムシンチにて下腹部正中に異常集積を示し、同部の CT, DIP にて大動脈周囲腫瘍による左尿路狭窄を示した症例に MRI とポジトロン断層 (PET) を行った。MRI にては腫瘍の T2 緩和時間は短く、線維性組織を考えた。18F フルオロデオキシグルコース (FDG) の PET では腫瘍への 18FDG 集積は低く、腫瘍/筋肉比は 2.0 で良性を考えた。比較のため検討した悪性リンパ腫、大腸癌リンパ節転移では腫瘍/筋肉比は 9.0, 5.2 となり、明らかな差が見られた。経皮針生検などにより、後腹膜線維症の早期例と確定した。各種画像診断を適切に組み合わせることにより、また新しい診断技術の開発により、早期に非侵襲的な診断が可能になると思われる。

12. PET データのオフライン画像処理の試み

瀬尾 信也 四月朔日聖一 畑澤 順

伊藤 正敏 (東北大・サイクロ・RI セ)

PET のデータ解析を目的とし、PET 装置とパーソナルコンピュータをネットワークし、PET データをパーソナルコンピュータに転送した。フロッピーディスクを介して画像データをユーザーに提供し、ユーザーが自由に画像処理できるようにすることを試みた。当センターには、新旧 3 台の PET 装置があり、画像データのフォーマットは必ずしも同一でないで、フォーマットを変換し統一した。これにより、PET 装置を意識することなく、同じプログラムで画像処理が可能となる。原則とし